

ローマ字文（日本式（訓令式））における外来語表記法の提案

藤家洋昭
大阪外国語大学

huziie@osaka-gaidai.ac.jp

竜岡 博
(財)日本のローマ字社
MXC04656@nifty.ne.jp

1. はじめに

日本式ローマ字は田中館愛橘 (1885a, 1885b) によって考案され、田丸卓郎 (1914, 1920) によって体系化された日本語ローマ字表記システムであり、英語関係者などの間では評判はよくないものの、他の方式のつづりかたに比べると日本語を書き表すうえでは合理的な面をもっている。そのため、今日英語などで書かれる言語学関係の文献における日本語の用例は、多くが日本式ローマ字によって表記されている。日本式ローマ字はその後若干の修正を経ていわゆる訓令式ローマ字と呼ばれるものになる。日本式ローマ字と訓令式ローマ字は全く同じものではないが、本質的な違いはなく、以下本稿では特にことわらない限り両者を区別せずに日本式（訓令式）ローマ字と呼ぶことにする。区別する必要がある場合には「狭い意味での日本式」「訓令式」と呼んで区別する。

日本式（訓令式）ローマ字はいわゆるカタカナ外来語以外の日本語を書き表すには理にかなった特徴を持つ反面、いわゆるカタカナ外来語を書き表すにはそのままでは問題があり、カタカナ外来語の書き表し方は、これまで提案が全くなかったわけではないが、決定的なものはないと言っている。本稿ではそれら問題点の解決法を提案する。本稿で提案する方法によって日本式（訓令式）ローマ字本体はそのままに、少数の原理により外来語を書き表すことが可能になる。

なお、本稿で提案するつづり方は藤家と竜岡が別々に考えたものであるが、結果として全く同じものであり、ここに共同発表という形で発表する。

2. 日本式（訓令式）ローマ字

2.1 概観

日本式（訓令式）ローマ字とはいかなる表記システムであるのか、簡単に復習しておく。表にあらわすと表1のようになる。

表1

a	i	u	e	o
ka	ki	ku	ke	ko
kya	kyu	kyo		
ga	gi	gu	ge	go
gya	gyu	gyo		
sa	si	su	se	so
sha	shu	sho		

za	zi	zu	ze	zo
zya	zyu	zyo		
ta	ti	tu	te	to
tya	tyu	tyo		
da	di	du	de	do
dya	dyu	dyo		
na	ni	nu	ne	no
nya	nyu	nyo		
ha	hi	hu	he	ho
hya	hyu	hyo		
pa	pi	pu	pe	po
pya	pyu	pyo		
ba	bi	bu	be	bo
bya	byu	byo		
ma	mi	mu	me	mo
mya	myu	myo		
ya	yu	yo		
ra	ri	ru	re	ro
rya	ryu	ryo		
wa	wi	we	wo	
n				

2.2 (他のシステムと比べたときの) 日本式（訓令式）ローマ字の特徴

日本式（訓令式）ローマ字をその他の主な（日本語の）ローマ字つづりとくらべる。その他の綴りの中でもっとも一般的なものとヘボン式ローマ字（ヘボン：Hepburn (1867)）であろう。しかしヘボン式ローマ字と日本式（訓令式）ローマ字は実は共通点が多い。違う点は表2にまとめられる。

表2

si:shi,	ti:chi,	tu:tsu,	tya:cha,	tyu:chu,
tyo:cho,	hu:fu,	zi:ji,	sha:sha,	syu:shu,
syo:sho,				
zya:ja,	zyu:ju,	zyo:jo		

どのように違っているかという点、日本式（訓令式）ローマ字の方がヘボン式ローマ字よりも使用している文字の数が少ないということがまずある。“c”, “f”, “j” が日本式（訓令式）ローマ字には存在しない。どこが違っているかというと、イ段、ウ段、エ段、オ段の音の一部だけに違いが見られる。その他はほとんど同じであり、母音の表記にいたっては全く同じである（これ以外にはねる音、つまる音の書き表し方にも違いがある）。

3. 外来語・外来音

日本語に本来なかった音を外来音と考えるならば、それは無限になってしまう。とてもすべて書き切れるものでは

ないし、また日本語という言語を表記する上では必要もないと考えられる。しかし、実際は日常用いられる外来音はごく限られていて決して無限ではない。本稿では外来音を、五十音のすきまの音、五十音の中に存在する音と考える。表3を見られたい。これは日本語に存在する（音節の）発音を発音記号で近似して記述したものである。

表3

a i u e o
ka ki ku ke ko kja kju kjo
sa ci su se so c(j)a c(j)u c(j)o
ɕa ɕi ɕu ɕe ɕo ɕ(j)a ɕ(j)u ɕ(j)o
ta ti tsu te to t(j)a t(j)u t(j)o
da de do
na ni nu ne no n(j)a n(j)u n(j)o
ɕa ɕi ɕu ɕe ɕo ɕ(j)a ɕ(j)u ɕ(j)o
pa pi pu pe po pja pju pjo
ba bi bu be bo bja bju bjo
ma mi mu me mo mja mju mjo
ja ju jo
ra ri ru re ro rja rju rjo
wa

（これ以外に、つまる音とはねる音がある）
この中から子音だけをとり出してまとめると次のようになる。

k g s c dz ɕ t tɕ ts d n ɲ ɕ ɕ p b m j r w

本稿で言う、五十音に存在する音とはこれらの音のことである。したがって英語の th [θ] やしとRの違い、ドイツ語のウムラウトの付いた母音øなどは外来音としても日本語には存在しないものとする立場をとる。これはほぼカタカナで書かれている範囲のものと同じと考えて差し支えない。具体的には次のような語に現れるものである。ミルクシェイク、ジェットエンジン、ファイル、コンツェルン、フュージョン音楽

このように外来音は無限ではないと考えるのであるが、それでもこれらの多くは日本語式（訓令式）ローマ字で書き表すのが困難であった。ただし、外来語がすべて外来音からなっているわけではなく、外来音を持たない外来語というものももちろん存在する。例 カード、ワープロ、マウス、キーボード。したがって問題になるものはより正確に言えば外来音を含む外来語、あるいは外来音の書き表し方である。

4. 日本語式（訓令式）ローマ字ではカバーできないもの
外来語がすべて日本語式（訓令式）ローマ字で書き表されないわけではもちろんない。今までの日本語式（訓令式）ローマ字の綴り方にとっても何の問題もなく書けるものもある。例えば次のようなものである。ワープロ、デスク、マウス・・・これらは表1に示した本来の日本語式（訓令式）ローマ字の範囲ですべて書くことができる。これら以外は日本語式（訓令式）ローマ字ではカバーできないのであるが、カバーできないものは二つのレベルにわけることができる。

4. 1 大して問題のないもの

本来の日本語式（訓令式）ローマ字のつづりにはないが、どうつづるかについてこれまで特に問題になったことがないものもある。それらを確認のため示しておこう。

ミルクシェーク miruku syēku

チェック tyekku

ジェットエンジン zyetto enzin

これらの例にあるような "zye" "tye" "zye" などというつづりは表1で示した、本来の日本語式（訓令式）ローマ字にはないものであるが、これらについては、直観からしても、上のような書き方で問題はない。

4. 2 問題の大きいもの

次に、次のような語を考えてみよう。パーティー、タワー、コンツェルン、ファイル・・・まず、「パーティー」にあるような「ティ」の音である。これは "ti" と書けばよさようなものであるが "ti" は「チ」と読むことになっているので、"ti" とするのは適当ではない。同様に「トゥ」の音も「ツ」との関係で適当な書き表し方が見当たらない。さらに、「ファイル」などに見られる「ファ」になると、"fa" とすればいいという意見があるかもしれないが、そもそも日本語式（訓令式）ローマ字には "f" が存在しない以上、日本語式（訓令式）ローマ字の枠の中で考えれば具合が悪い。

以上述べた、日本語式（訓令式）ローマ字で外来語を書き表す上での問題点を整理すると次のようになる。

ティ・トゥと読ませようとしてそれぞれ "t i" "t u" と書くと「チ」「ツ」になってしまう。「ツェ・ファ」などはまったくどうしていいかわからない。これらはすべて表3で示した子音のうち、本来イあるいはウとしか結合しないものがイあるいはウ以外の母音と結合しているもの、あるいは逆に本来イあるいはウと結合しないものがイあるいはウと結合しているものであることがわかる。また、多くは2. 2で示した、他のシステムとの比較で特徴としてあげられた点でもある。以下、これらについて具体的な提案をする。

5. 本稿での提案

5. 1 基本コンセプト

上で指摘した外来音がこれまでの日本式（訓令式）ローマ字では、うまく書き表すことができなかった。とはいってものまったく解決法が示されていないわけではない。例えば「学術用語集」には外来音の書き表し方について次のような方法が示されている（文部省大学学術局情報図書館課(1974)）。

"f" "d" を用いて、「ファイル」「ディスク」は "fairu" "disuku" のように表す。「コーティング」「コンツェルン」の書き表し方は本稿で提案する方法と同じである。

この方法が悪いとは言わないがどうもすっきりしない。"f" の使用など、なぜそこだけ "f" を用いるのか、他の「フ」の音との関係が明らかでなく（「フラスコ」などは外来語であっても "furasuko" ではなく "hurasuko" とする）、一貫性がなくその場しのぎで、全体として統一的な考えに基づいていない。

そこでまず本稿で提案する書き方の基本コンセプトを述べる。ポイントは三つある。

- ・一貫性
- ・文脈など他の情報によらずにつづりだけで発音が決定
- ・日本式（訓令式）ローマ字本体にはなるべく手をつけない

一貫性とは、なるべく少数のきまりによって例外がなるべくないようにつづるということである。文脈など他の情報によらずに発音を決定とは、簡単にいうと、つづりと発音が一対一できまるということである。もし "ti" とつづって「チ」とも「ティ」とも読ませようとするなら、つづり以外の情報でもって発音をきめなければならなくなり、発音を示す表記としては好ましいものではない。それなら例えば「ティ」を "ti" と書き表し、「チ」の方は別のつづりにすればよいということにもなるが、先にも述べたように、いわゆる外来語を除いた日本語を書き表す上では日本式（訓令式）ローマ字はうまくできていて、「チ」の方を別のつづりすることは日本式（訓令式）ローマ字本体の方に手をつけることになり、本体の方に手をつけることは日本式（訓令式）ローマ字の利点を崩すことになり得策ではない。したがって本体には手をつけずにいわば建て増しのような形にする。

5. 2 非イ段化・非ウ段化・ウ段化

4章でも少し触れたように、問題は i と u が関係する子音に集約できる。つまり、i の前あるいは u の前の子音が

その他の母音 (a, e, o) のものと比べて著しく異なるのである。厳密には a の前、e の前、o の前の子音もそれぞれお互いに異なっているが、その違いはの場合無視できるほどのものである。i と u の前が有標、その他が無標と考えることもできる。以下本稿では子音が i のまえのものになることをイ段化、u の前のものになることをウ段化と呼ぶことにする。例えば、t の発音は [t] であるが、イ段化すると [tʲ] ウ段化すると [tʷ] になる。（ハ行の子音）h の発音は [χ] であるが、イ段化するとヒの子音 [ç]、ウ段化するとフの子音 [ɸ] になる。これらは比喩的に言う日本語における「自然な」変化である。もちろんこれはあくまで比喩であって実時間において変化するわけではない。それではこの「自然な」変化を「不自然」にしたらどうなるか、つまり i の前でもイ段化せず、u の前でもウ段化しないようにしたらである。そうすると、タ行の場合、それぞれ [t i] [t u] となる。このことを本稿では非イ段化、非ウ段化と呼ぶ。ウ段化は自然におこるが、それでは今度はウ段化しないはずのものを「無理に」ウ段化させるとどうなるか見てみよう。タ行の場合、ウ段化した子音は（ツの子音）[tsʷ] であるからそれを u 以外の子音、例えば e の前にもつてくると [tsʷe] すなわちコンツェルンの「ツェ」になる。

日本式（訓令式）ローマ字で書き表し方に困る外来音はすべて i と u に関係しているわけだからイ段化・ウ段化をうまく処理してやれば解決できるはずである。これらについて個別につづりを与えるのも一案かもしれないが、もっと一般性を見出す必要がある。

5. 3 具体案

5. 3. 1 「ティ」「トゥ」など

ティ、トゥと読ませたいのに「チ」「ツ」になってしまうのをどうすればいいか。これには i, u の前の子音が本来のイ段またはウ段の子音ではないことを示せばよい。印としては何でもよいが、' を使うことにする。

基本規則1：非イ段化・非ウ段化のためには' を加えよ。' = 後ろの音の影響を防ぐバリア

この基本規則により「パーティー」「タトゥー」は "pāt'i", "tat'ū" と書き表される。「ディスク」のディなどは "di" とすればいいように見える。「訓令式」ローマ字では「ヂ」に相当するものも "zi" とされ、「d i」を「ディ」に当てても問題はない。しかし、次のような理由から "d' i" とする。まず、「ディ」の子音は非イ段化のものであり、非イ段化には ' を加えるという原則からすると一貫性という点から見て ' を入れた方がよい。' を入れることによつ

て「訓令式」本体に影響を及ぼすことはない。次に、「狭い意味での日本式」ローマ字では「ヂ」に相当するものを "di" としているので、ディを "d i" とすると衝突がおこる。"d i" なるつづりの必要性の議論はさておいて、「狭い意味での日本式」ローマ字を尊重すると "di" とすべきではない。

5. 3. 2 「ファ」「ツェ」など

これでとりあえずディやトゥなどは書き表せるようになった。残りはファやツェなどである。これらの発音は [ɸa] [ɕe] のようであり、子音の部分はウ段のものと共通していることがわかる。したがって、u の前の子音であることを示せばよい。ウ段化した子音であることを示す印として w を用いる。

基本規則 2 : ウ段化のためには w を加えよ。

この基本規則によって、「ファイル」「フィールド」「フェルト」「コンツェルン」は次のようになる。

"hwairu" "hwirudo" "hweruto" "kontwerun"

5. 4 y の再解釈

上で述べたウ段化や非イ段化という考えをもとに、従来からの日本式（訓令式）ローマ字をあらためて見てみると、"y" の果たしている役割との共通性に気づく。つまり "y" の果たしている役割は「イ段化」である。

このようにして "y" の役割を再定義すると、先に直観的に問題のないものとして処理した「ミルクシェーク」、「チェック」、「ジェットエンジン」にも同じ基本規則による説明が付く。

こうしてみると本稿での提案は従来からの日本式（訓令式）ローマ字の考え方によくあっているということができよう。

"y" に関連して付け加えておくと、「デュエット」などの「デュ」は本稿の基本規則に従えば "dyu" となる。これは、一見、"y" の再解釈、つまり "y" はその前の子音をイ段化するという事に矛盾するようであるが、実は矛盾しない。基本規則 1 に記したように、' が後ろからの影響を断つバリアの役割を果たすからである。

5. 5 将来の拡張性

本稿で示した基本規則に従えば、現在は一般的でなくとも将来一般的になるかもしれない外来音にも対応することができる。例えば「ファジーではなくファズィーと発音すべきか」という例における「ズィ」などは今日では一般的ではないが、本稿での基本規則によれば非イ段化であるから ' を加えて "zi'" とすればよい。

5. 6 直観との関係

以上、理論面から検討してきたが、本稿で提案する書き表し方が直観にもよくあっていることを示しておく。

直観的に言って、「ファ」を短く発音すると「ファ」に、「ツァ」を短く発音すると「ツァ」になる。u の短いものが w に、i の短いものが y で書き表されることも直観に合っている。

6. 結論

以上述べた考え方に従えば日本式（訓令式）ローマ字をくずすことなく外来語を表記することが可能になる。

非イ段化

非ウ段化

イ段化

ウ段化

という考えに基づいた基本規則により、これまでの日本式（訓令式）ローマ字では書き表すことのできなかった外来語が表記することが可能になる。

ミルクシェーク miruku syēku チェック tyekku

パーティー pātī タトゥー tat'ū

コンツェルン kontwerun

ファイル hwairu

7. おわりに

日本式（訓令式）ローマ字による外来語表記は頭痛の種であったが、本稿で示す方法で表記すれば日本式（訓令式）ローマ字の基本的な考え方を崩すことなく、少数の基本規則にしたがって、一貫的に外来語を表記することができる。また、日本人の直感にもあっていると言える。英語や、ヘボン式ローマ字に慣れた目からは、一部随分異様にうつるつづりもあるが、日本式（訓令式）ローマ字そのものが英語やヘボン式ローマ字からみると異様であり、かなり強い抵抗を伴うことを考えると、大きな問題ではないと考えられる。

参考文献

田中館愛橘 (1885a) 「本会雑誌ヲ羅馬字ニテ発兌スルノ發議及ビ羅馬字用法意見」『理学協会雑誌』1 6

田中館愛橘 (1885b) 「発音考」『理学協会雑誌』1 7

田丸卓郎 (1914) 『ローマ字国字論』日本のローマ字社

田丸卓郎 (1920) 『ローマ字文の研究』日本のローマ字社

ヘボン : Hepburn, J. C. (1867) 『和英語林集成』

文部省大学学術局情報図書館課 (1974) 「ローマ字による学術用語の書き表し方」